

31F-am10

各種精神作業負荷による唾液ストレスマーカーの変動

○高木 渉¹, 高木 邦明¹, 出川 雅邦¹(¹静岡県大薬)

【目的】摂食障害は思春期・青年期の女性に好発する食行動に基づく慢性の難治性疾患である。課題は、本人たちに病識がない場合が多く、治療者側が意識していないと早期発見、早期治療が難しいところにある。これまで我々は種々の精神作業負荷により変動する唾液内成分を分析してきた。今回の発表では、食欲を一過的に抑制する精神負荷は、これまでの精神負荷による唾液ストレスマーカーの変動と異なることを見いだしたので報告する。

【方法】インフォームドコンセントの得られた健康成人に対し、種々の精神作業負荷を課し、その前後で唾液採取を行った。サリベットにより採取した唾液の分泌型抗体(SIgA)およびコルチゾールを ELISA で、アミラーゼを酵素法で、そして主にペルオキシダーゼとチオシアン酸イオンによる微弱発光(UCL)を化学発光測定器で計測した。

【結果・考察】唾液ストレスマーカーの多くは、急性の精神作業負荷で一過的に上昇する。今回の被験者においても、クレペリンテストや軽度認知症テストにより、総てのマーカーは 1.2~2.0 倍に上昇した。しかし、好物などを食しているパートナーを観るだけに抑制させた被験者においては、アミラーゼが上昇するのに対し、SIgA と UCL は有意に減少した。この結果から、唾液ストレスマーカーの制御機構は個々により異なり、複数の支配系統で制御されているものと推測した。肥満恐怖が根底にある摂食障害を改善するためにも、食べたいけど食べたくないという複雑な感情を正確に捉えられる指標の開発が望まれる。